The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち ：ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」
Author(s)	王, 石諾; 三好, 恵真子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2025, 51, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100815
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち
―ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」―

王　石諾・三好　恵真子

目　次

1. はじめに
2. 国際結婚の枠組みに縛られず一人ひとりの生活全体の注目へ
3. 対話的構築主義によるライフストーリー法から女性たちの人生を読み解く
4. 移動を介した経験から読み解かれる女性たちの「歴史実践」
5. 対話を通じて拓かれていく「歴史実践」
6. おわりに

日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち
―ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」―

王　石諾・三好　恵真子

1. はじめに

これまで筆者らは、「満州」の歴史的記憶を引き継ぐ中国東北において、80 年代以降の「単位制社会」の弱体化に伴って結婚移民となり日本の東北地方に移動してきた中国人女性に目を向け、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生き抜く女性の「歴史実践」に着目しながらライフストーリー法により研究を深めてきた。戦争の歴史における「植民支配―被支配」の両端に置かれる「二つの東北」は、それぞれ異なる近代化の経路を歩みつつも、類似する巨大な進歩叙述が牽引する下で、「中央」と対峙する「周辺」の立場に共に追い込まれていった。すなわち、「二つの東北」には、「南方」と「東京」という対極にある「周辺」としての二つの「東北」が共有する痛みの意味が次第に見えてきたのである。

ただし、本研究では、国際結婚の女性という枠組みをはじめから設定していたのではなく、筆者らが福島に赴く契機となったのは、2011 年の 3・11 震災における地域の中国人の震災経験とその後の暮らしの実情に対する関心により開始した 6 年前の現地調査からであった。当初の聞き取り調査は、地元の大学に通う中国人留学生たちに行っていたが、その間に、彼ら・彼女らの勧めで地元の民間日中交流イベントに参加した際に、そこに長く関わっている女性たちに出会うことができた。留学生たちが「よくお世話になっている」と口にするこれらの女性たちは、福島に日本人男性と結婚して移住してきた中国出身の人々で、多くは 1990 年代後半から 2000 年代初頭から日本で暮らしている。彼女らは 20 年以上も福島で生活を営んでおり、地域に散居しているものの、互いにネットワークを作りながら、定期的にイベントを開いて集まっており、その場にて若者の留学生たちに手作り料理をもてなしていた。3・11 震災を肌身で経験した彼女らであるが、それでも震災後に留まり続け、現在までも福島の地で日々の暮らしを営んでおり、またこうした現地の女性ネットワークに大きく依存しているがゆえに、次々と知り合いを筆者らに紹介してくれたため、インフォーマントの輪が広がっていった。こうして彼女らの多様な集まりの場にも参加させてもらう機会を得たことにより、彼女らの日々の営みの中から改めて筆者らに気づかせてくれることが多々あったのである。

ここでまず特筆したいのは、こうした日本東北地方の福島県に生きる女性たちは、中

国東北出身者が圧倒的に多いという点であった。ただしそれは偶然とは言いがたく、既報（王・三好 2022；2023；2024）でも論じてきたように、実際には日中「二つの東北」がそれぞれの土地柄に由来して国際結婚の構造の一端に置かれてきた歴史的文脈があり、また移住してきた女性たちも日々の暮らしの中で「二つの東北」の痛みを背負いつつ自らの人生を営んでいることが分かってきた。つまり、筆者らのこれまで長期的な調査の中で次第に浮かび上がってきたことは、「満洲」の工業基盤に深く関わって成立した戦後東北部の「工業単位制社会」[1] が 90 年代頃に崩壊したことを端緒に、彼女らは、東北部の土地柄による人脈ネットワーク（戦時の入植開拓移動で戦後も現地に残らざるを得なかった残留婦人・残留孤児の民間ネットワーク）を頼りながら、片言の日本語しか話せないまま日本の東北地方に結婚移住してきている。そして、彼女らは「満洲」時代を直接経験した世代ではないものの、日本への移住経験を通じて、日常生活の中で移住先の東北地方に住む満洲経験者である「お爺お婆」[2] との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部で無意識に体感してきた「満洲」の痕跡が蘇ってくることも分かってきた（王・三好 2023）。さらに、3・11 震災直後の混乱下にて多くの外国人が帰国する中で、家族のために福島に留まり続けなければならなかったことも少なくなかったが、言語の壁がある上に、被ばくや子供の安全への不安が高まる中で、彼女らは中国人同士の人間関係により自発的に集まりながら相互扶助のネットワークを形成し（王・三好 2022）、様々な葛藤に苛まれながらも、この福島の地に留まり続けて生を営むことを選択していたのである（王・三好 2024）。来日前、女性たちは、試行錯誤の末に「先進国としての日本」を思い描きつつ結婚移住してきたのであるが、実際に経験したのは、彼女たちの期待とは異なる現実であった。すなわち、かつての「満洲」からもたらされた傷跡と重ね合わせるかのように、移住後に待ち受ける彼女らが一人では抱えきれない様々な辛さがあることも分かってきたが、それでも彼女らは福島に留まり続けたのである。ただし彼女らにとってそれは容易なことではなく、3・11 震災を契機に立ち上げられた女性ネットワークが示すように、共に味わった悲痛な震災経験が、彼女らを「よそ者」から地域社会に受け入れられる存在へと変え、そこから初めて、地域との絆を深めながら、互いに知り・理解し・支え合うようになったのではないかと推察された。この意味において、震災経験は、図らずも彼女らが日本東北地方の重層的な歴史を知ろうとする情動的な起点ともなったのではないかと次第に分かってきた。このように「二つの東北」をめぐる重層的な文脈を掘り下げていくにつれて、女性たちの主体性に満ちた生活者としての営為が一層鮮明に見えてきたのである。

以上、筆者らの現地調査で見えてきた複雑な現実を踏まえつつ、国際結婚に関連する既存研究を精査すると、本稿 2 章で詳述していくように、歴史学や社会学など多様な学問的な視点から蓄積されているが、2000 年頃までは、女性の出身国による差異からは議論されず、「アジア人花嫁」として一括りにされ、また移住先の日本社会への影響に着目した受け入れ側の視点が殆どであった。そしてそれ以降からは出身国・出身地域社

会の文脈も重視されつつある総合的視点へと変化しつつあり、多面性を持った「個」の人間へと、一層立体化しつつある主体性を持つ女性像の描写への動向は窺えた。これらの先行研究から得た知見は多くあるものの、出身地域である中国東北部の土地柄があくまで女性たちの結婚移住の要因やルートとして言及されており、実際にそれに深く織り込まれつつ福島の地で留まり生きることまでに行き着く彼女ら一人ひとりの人生経験については、議論の余地が残されていた。加えて、移住前後あるいはライフコースによる区切りや国際結婚か否かといった予め決められた枠組みにこだわり過ぎると、逆に見落とされてしまうことが往々にしてあるのではないかと考えた。なぜなら、こうした日中「二つの東北」の歴史的な繋がり及びそれに依拠する移動を介した生活経験において、彼女らの新たな繋がりやその主体的に創出できたのは、彼女らが地域を舞台に地道に展開していく生活の営為そのものに目が向けられたからこそであり、従来言及されてきた「災害弱者」や地域の「よそ者」といった議論を越えて、「二つの東北」を繋ぐ「結び目」[3] となり得る彼女らの新たな可能性を窺い知ることができたからである（王・三好 2024）。このように国境を越えて移動する生活者としての女性たちの日々の実践に着眼できたのは、筆者らが長らく彼女らと関わってきたことに加えて、本稿で改めて整理していくその方法論にも大きく依拠していると確信している。すなわち、歴史学者である保苅実が提唱した「歴史実践」という概念に大いに示唆を受けたからであり、また、桜井厚が提示する対話的構築主義のアプローチを基にするライフストーリーという研究手法を用いたことで、彼女らの日常の細部に潜む「歴史実践」とその意義が見出すことができたと改めて強調できる。

そこで、本稿では、ライフストーリー法（対話的構築主義）を用い、時間をかけて交流を続けることで見えてくる中国東北部から福島に移住した中国人女性たちの「歴史実践」の意義について、これまでの成果に鑑みつつ、とりわけ方法論の重要性の側面から論じていくことを目的とする。

以上を踏まえ、本稿では、まず次の 2 章において、国際結婚の枠組みから出発する先行研究を整理し、本研究との対象や研究手法の違いを説明した上で、本研究の視座を明確化していく。その上で、第 3 章にて「対話」を重視するライフストーリー法とその有効性を説明し、続く第 4 章では保苅実の「歴史実践」の概念に依拠しつつ、本研究では移動を介した生活経験から読み解く「歴史実践」により見えてくる事柄について論述していきたい。すなわち、結婚移民である女性たちが互いの痛みに共感しつつ生きるその営みこそが、国境によって閉ざされることのない、二つの東北の「結び目」となる「歴史実践」の可能性を示唆することができたのである。最後に 5 章では結論として、彼女らの「歴史実践」と「対話」を重ねながらそれを見つめてきたからこそ受け止められた、調査者である我々にもたらされる能動的な影響と未来への展望について触れ、まとめに導いていきたい。

2. 国際結婚の枠組みに縛られず一人ひとりの生活全体の注目へ

日本社会における国際結婚を通じて移住してきたアジア人女性への関心は、1980年代後半に農村地域での「男性結婚難」という社会問題に伴い、その解決策として実施された「アジアからの嫁入り」に端を発している。こうした国際結婚の女性をめぐる80年代以来の既存研究では、2000年代までは女性の出身国も問わず「農村の花嫁」として一括りにされ、移住先の日本地域社会に焦点を当てる視点（桑山1995；右谷1998）が中心であった。しかしそれ以降は、これまで「被害者」や「判断力喪失者」というような弱者としての描かれ方から脱すべく女性結婚移民を主体性のある「行為者」（賽漢卓娜2011）として把握する基本的視点を立ちつつ、さらに「個」である一人の「生活者」としての多面性を描き出すことを重視する視点（藤田2005；福村2017；李2018）へと変わりつつある。そうした流れの中で、より一層立体化していく結婚移民の女性像の描写を目指し、また出身国ないし出身地域社会の文脈も視野に入れるという潮流も芽生えてきた。

従って、こうした動向に伴い、女性自身の「行為主体性」が重視されつつ、彼女らの内側からの眼差しを描き出すために、従来の質問紙調査に加え、質的調査法も併せて使われるようになってきた。例えば女性たちの移住要因（郝2010）や移住後の母国親族との関わり方（胡2016）といった特定した問題の実情をある程度に把握するために、半構造インタビューの調査手法が最も多く用いられた。また、社会学者の賽漢卓娜（2011）は、日本の農村部に嫁いだ国際結婚の中国人女性を対象に、ライフストーリー法を用いている。ここでは、三つの人生段階においてそれぞれ5～6名女性に対してインタビューを実施し、多数の語り手のライフストーリーを集積して帰納的推論を重ねることにより、各段階における国際結婚のメカニズムという社会的現実（リアリティ）を見出すことを可能にした。ただし、ここで留意しておきたいのは、賽漢卓娜（2011）の研究調査は、ライフストーリー法の解釈的客観主義アプローチから出発していることであり、その理由は、個々の人生を通じて特定の社会的現実を明らかにすることに力点を置いたからであるとする。そのような意味において、質的調査を用いるようになった研究は、いずれも、国際結婚研究をめぐる視点が次第に多角的に補完していく模索途上段階であるがゆえに、その実態やメカニズムといった社会的現実を明瞭化していくことに着眼しているのだと考えられる。また、こうした出発点に結びつくために、調査対象者の選択に際して、「対象となる事例が理論的に「飽和 saturation」した時、すなわちそれ以上の新しい事例を追加しても新たな属性や関連性が出現しないことによって完了する」（桜井2002：26）という基本的視座から、調査者は、できるだけ多様な経歴の対象者の構成を意識していることが読み取れる。

例を挙げるならば、「存在感のない夫」と「支配的な姑」といった「日本人家族との

人間関係」(桑山 1995:32)、業者婚する女性の結婚動機におけるプッシュ・プール要因(郝 2010)、あるいは「農家の嫁」という身分への適応実態や次世代教育の戦略(賽漢卓娜 2011)などといった具体的な事情に象徴されるように、「国際結婚」はグローバル化が進む中での現象や近代の産物と捉えられがちである。しかし、賽漢卓娜(2011)は、実際には、日本では、農村の基底をなす「家」や「村」の伝統的な論理に過重な負担を背負うことにより女性たちが「農村の嫁」としての身分を放棄する中で、その代わりにアジア人女性が生産力と再生産力の両面から期待され、迎え入れられており、こうした中で、女性たちが移住後の家庭で直面した家族間の衝突を、日中のジェンダー役割観念の食い違いとして捉えることができると賽漢卓娜(2011)は指摘している。

この示唆が示すように、筆者らが現場で目の当たりにした女性たちが直面する悩みの多くが、国際結婚の構造下において彼女らに共通するジレンマであり、その解釈には、既存研究から得た知見は大いに役立った。しかしながら、国際結婚の枠組みでは、女性たちの全ての経験が家庭や家族との関係性の下で問われがちことがあることを踏まえ、また筆者らは国際結婚に関する立ち位置から女性たちと関わり始めたわけではないため、改めて本研究における視座を明確にしておきたい。

冒頭で触れたように、筆者らは3・11震災経験とその後の生活実態への関心から国際結婚で福島に結婚移住した中国人女性たちとも関わるようになり、6年間にわたり福島在住の11名の女性たち[4)]と交流するようになった。調査を重ねる中で分かってきたことは、彼女らはこれまでの人生経験を裏返すかのようにレジリエンスの種へと転換し、「災害弱者」を越えて震災直後の地域の支えとしての役割も果たしていた(王・三好 2022)。ここで特に見過ごしてはならないのは、震災を契機に立ち上げられた多くの女性ネットワークが示すように、共に味わった悲痛な震災経験が、「よそ者」であった彼女らを地域社会に受け入れられる存在へと変えていったことである。ただし留意すべきは、彼女らの多くが依然として「心が揺らいでいる」と語っていた点である。そこでその「揺らぎ」の内実を見つめていく過程において、日本の東北に移住することにより改めて蘇ってくる「満洲」の記憶及び国家記憶の権力構造を意識しつつ自らその複層的な「満洲」像を模索し続けていた彼女らの営みが徐々に見えてきた(王・三好 2023)。日中「二つの東北」が国際結婚の背景に位置づけられるのは、戦時中の「満洲農業移民」政策下の人々の移動と深く繋がっており、こうした戦争の歴史の痕跡は、両地域を結ぶ人脈ネットワークだけでなく、世代を超えて連鎖した心の傷も残していることも分かってきた(王・三好 2024)。

以上のような女性たちの営みが見えてきたのは、彼女たちを移住前後・結婚前後といったように区分せずに、彼女らの生活の全体や人生経験の連続性を見つめてきたからこそ、心の内面への理解を含め、国境を越えた「二つの東北」のつながりが息づいていることが分かったのではないかと改めて感じている。一方、女性たちの生活の舞台であるこの地域は、国際結婚の既存研究において、中国東北部の「満洲」の歴史から残留婦

人・残留孤児による日中民間の人脈ネットワークが頻繁に研究者の間で議論され、「満洲」の歴史が女性たちの移住ルートとなる「社会関係資本」（郝 2010）として扱われている。しかし実際には、女性たちにとって「満洲」の記憶は人生の原風景でもあり、移住後にむしろ問い続けられるものであることがわかった（王・三好 2023）。さらに「二つの東北」の共通した痛みへの共感については、彼女らが日々の生活の中で受け止めてきた双方の「東北」の痛みというものが、3・11 災害をも経験したからこそ、後述するように東アジアの歴史の連続性を実感させるものであり、ひとりの生活者として尊い「結び目」となり得る可能性を示唆することが、筆者らが調査の中で徐々に実感できたのである（王･三好 2024）。一方、本研究のインフォーマントは、中国東北部生まれ育ち、「満洲」記憶を背負って「単位社会」の崩壊を体験し、その人生の局面を打開するために日本東北地方に結婚移住し、さらに 3・11 に見舞われてもこの地で留まり続ける、いわゆる「二つの東北」を生きる 50 代 60 代の女性たちである。一見すると、先述した「多様な経歴の調査対象者の構成」とは異なり、類似した人生経歴であるように思えるが、農業に専念し季節のリズムに合わせて生活している人、懸命に中華料理店を営んでいる人、子育てをしながら家の近くの零細工場でアルバイトをしている人、地域のボランティア活動に熱心な人などがおり、この小さな地域を舞台に、それぞれが自らの状況に合わせつつ暮らしを営んでいる多様性がある。そこで、国境を越えた移民であることを考える際に、森本（2009）が従来の移住元・移住先の区切りを越え、移民を「移動する『境界人』」としての捉えている、以下の指摘を改めて考えてみたい。

> 「「境界人」とは、必ずしも恒常的に周縁に位置することを意味しない、二つあるいはそれ以上の集団の円の重複部分に位置する人、それは、いずれにも完全には属していないと同時に、いずれにも部分的に属する「A または B」ではなく「A かつ B」を意味する。…移動する境界人は、移動の産物であると同時に、異なる接触状況を自らが移動することによって作り出す存在でもある。…「二つの祖国」に引き裂かれた周縁的な位置付けよりも、むしろ集合円の重複部分「A かつ B」の強みを活かしながら生き抜いていく主体的な姿である。…」（森本 2009： i–iii）

こうした示唆にも鑑みつつ、次章にて、本研究の基盤となった対話的構築主義のアプローチによるライフストーリー法の重要性について改めて確認していきたい。

3. 対話的構築主義によるライフストーリー法から女性たちの人生を読み解く

3.1 対話的構築主義というアプローチ

ライフストーリー法の調査対象について、桜井（2002：33）は、「生活としての生や経験としての生が存在しているはずにもかかわらず、語りとしての生がなかったとされ

る人たち」に光を当てている。すなわち「自分の生を語ることを抑圧されたり、たとえ表現することができたりしたとしても、時の支配的文化から周縁化され無視されてきた人々」であったと指摘している。この点を踏まえながら、本研究で着目する女性たちの状況を顧みるならば、先述したように、彼女らは日本語の壁を感じつつ日本社会に長く暮らしており、何よりも中国全土の普遍的叙述により周辺化され、加えて日中関係の緊張化の中で、「語りがたさ」を感じつつある人々であったといえよう。こうした時代や生活環境の激動に向き合いながら日常に見え隠れする女性一人ひとりの歴史実践を見つめる上で、個人の「生活」に焦点を合わせ、巻き込まれた生活世界の諸相や変動を「経験の語り」から読み解くライフストーリー法（桜井 2012）が適切であったのではないかと改めて得られた結果を踏まえつつ回顧している。

実のところ、ライフストーリー法には複数のアプローチがあり、2 章の先行研究で述べた賽漢卓娜（2011）の研究は、語り手の「主体性」に重点を置いた解釈的客観主義に立ったものである。それに対し、本研究では、ライフストーリーの産出に関わるもう一方の当事者である聞き手の立場にも注意を払い、語り手と聞き手の「相互行為」における権力性やインタビュー過程の統制の問題をも俎上に載せる対話的構築主義のアプローチを採用した。

ライフヒストリー法を継承し発展させてきたライフストーリー法の特徴について、桜井（2002）は、テープおこし（トランスクリプション）の編集の仕方を巡って以下のように解釈的客観主義と対話的構築主義のライフストーリー法を区別している。前者は「調査の対象である語り手に照準し、語り手の語りを調査者がさまざまな補助データを補ったり、時系列的に順序を入れ替えたりするなどの編集をへて再構成される」ことに対し、後者は「口述の語りそのものの記述を意味するだけでなく、調査者を調査の重要な対象である」と位置付けている。すなわち、「調査者の位置付けが異なる」（桜井 2002：9）ことが両者を区別する大きな理由であると考えられる。

さらに、桜井（2002）は、方法論的な認識枠組みに基づき、ライフヒストリー法の代表的なアプローチを以下の三種類に分類している。一つに「古典的」とも言える演繹的な推論を基本となす実証主義的アプローチであり、残りの二つは帰納論的な推論を基本となす解釈的客観主義アプローチ及び対話的構築主義のアプローチである。これらのうち、社会的現実（リアリティ）を重視している実証主義と解釈的客観主義よりも、桜井（2002：9）は基本的に対話的構築主義のアプローチに依拠し、その観点から「調査者―被調査者の社会関係やインタビューの相互行為のあり方、解釈や分析の方法を解説する」ことを試みている。こうしたアプローチから出発するライフストーリーに関して、本稿では、「インタビューの場面」と「分析の場面」を巡ってその特徴を以下のように整理した。

まず「インタビューの場面」において、従来、標準化された質問紙を用いたインタビューとは異なり、経験した出来事や社会過程の主観的意味を把握するために、語り手の発話を阻害しないように配慮しつつ、比較的自由な会話という形式で行われていた。なぜな

ら、ここでの目的は、単に情報収集にあるのではなく、語り手自身の概念ないしカテゴリーの定義や語りのコンテクストを理解することにあるからである。そのため、語り手が「何を語ったのか」という語りの内容だけでなく、「いかに語ったのか」という語りの様式にも注意を払わなくてはならない。

しかしながら、語り手は単なる情報提供者ではなく、「十分に聴衆（インタビュアー、世間など）を意識」し、「インタビューの場で語りを生産する演技者」であると桜井（2002：30）は指摘している。すなわち、語りは「インタビューの場で語り手とインタビュアーの双方の関心から構築された対話的混同体」であり、両者の「相互行為を通して構築されるもの」である。その意味において、ライフストーリーは、「過去の出来事や経験が何であるかを述べること以上に、〈いま―ここ〉を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きること」という基本的視点に立ち、両者の「共同作品」である（桜井 2002）と理解される。この点に鑑み、語りそのものは語られる「場」によって変化することを十分に意識した上で、語り手とインタビュアーとの信頼関係、いわゆる互いの信頼や友好を意味する「ラポール」は極めて重要となってくる。

次に「分析の場面」において、ライフストーリーを解釈するには、大きく以下の二つの軸がある。一つは、「語られるもの」という語りの内容あるいは「物語世界」であり、もう一つは「語る」という言語行為に含まれる社会的・制度的コンテストに照準する「ストーリー領域」と呼ばれるものである（桜井 2012）。両者の違いについて、語りを構築する主たる主体から見ると、前者が「語り手主導によるプロット化の限定に応じてインタビューの場から一定の自律性をもった物語」（桜井 2012：76）であるのに対し、後者が語り手と聞き手の相互性が中心となる。とりわけ後者の「ストーリー領域」では、語り手と聞き手（インタビュアー／読者）の社会関係を表している。すなわち、「いかなるインタビューの場においても語り手が調査者をカテゴリー化し、それに応じた自己カテゴリー化をもとに語りが産出されている」（桜井 2012：158）ために、聞き手が調査の枠組みで語り手をカテゴリー化するのと同様に、語り手も聞き手を主体的にカテゴリー化するという認識があった。そのゆえ、次節で詳述していくように、語り手と聞き手との対話の文脈で見えてくる権力関係も分析の一つの重点として捉えるべきだとされている。

以上、まとめてきたように、インタビューと分析のいずれの場面においても、調査者である聞き手の存在を強く意識し、また語り手と聞き手の相互行為も強調されることが、対話的構築主義のアプローチによるライフストーリー法の特徴として念頭に置いておく必要がある。

3.2 「不調和音」に目を向けつつ「対話」を目指す

ライフストーリーは聞き手と語り手の両者の「共同作品」であることを、前節で説明したが、ここで留意すべきは、その「共同」という意味の内実である。つまり、インタビュー

における言語的コミュニケーションが「共同制作」の過程として、単に調査インタビューのコミュニケーションが滞りなく進展できるよう、聞き手が相づちや話を促しなどのサポーティブな役割を担いながら、語り手と共に調和的に語り手のモノローグ的な物語を構成させる、といった予定調和的な相互行為を強調するものでは必ずしもなく、むしろ両者の間に生じた不調和音やトラブルを「共同制作」という観点から見直すことで、「不調和音への聞き手の反省」とそれを通じて期待しうる語りの多声性に力点が置かれていること（桜井 2015：24–25）を押さえる必要がある。

なお、こうした「不調和音」はどこに由来するかというと、語り手と聞き手の関係における「非対称性」であると言える。こうした「非対称性」においては、一つはインタビューにおける語り手と聞き手の相互行為から生じるもの[5]であり、もう一つ特に留意しておきたいのは、両者の関係の外部の社会構造から生じるもの、すなわち徐々に浮かび上がってくる両者が属するコミュニティに由来する「社会構造内で非対称な社会的位置付け」である（桜井 2012：159–160）。加えて、桜井（2015：45–47）によれば、聞き手が描き出す物語もモノローグ的な文脈に過ぎず、「ライフ」の持つ豊かな・ポリフォニー的文脈には決して還元できないために、語り手の語りが想定されるカテゴリーをはみ出す状況がしばしばあるとする。

このような語り手と聞き手の間の「非対称性」を念頭に、ここでは、桜井が目指した「不調和音への聞き手の反省」の意味について確認しておきたい。前節で触れた〈ストーリー領域〉に対する構築主義的な視点から、石川・西倉（2015：5）は語り手が経験してきたことを語る際に、比較的自由があるものの、決して本当の自由ではないと言及している。なぜならば、調査者が自らの「一定の構え（志向性）」（桜井 2002：171）に基づいてインタビュー過程を統制しているからである。こうした「構え」の存在は常態であり、それを避けるよりも、むしろ「その構えがどのようなものであるかに自覚的」（桜井 2002：171）である姿勢が重要となり、こうした「調査者のリフレクシビティ」（石川・西倉 2015：6）も非調査者に対する認識の変更を促進することが期待される。

上記の観点と通底するように、石川（2015）はさらに、インタビューを行っただけでは「対話」したことにならないとし、以下のように強調しながら「対話」の意味を明確化した。

> 「理解できないことを語る相手ではなく、相手の語ることを理解できない自分のほうを問い直さざるを得ない地点に至らないとすれば、そのインタビューを〈対話〉と呼ぶことはできない。」（石川 2015：221）

つまり、従来の望ましい調査者像とされた、自らの「構え」（「バイアス」ともみなされる）を持ち込みなく客観的で中立的であることとは異なり、むしろ調査中に徐々に気付いてきた自分自身の「構え」そのものに真摯に応答する調査者・聞き手の姿勢が要求

されると考えられる。こうした側面から、インタビューの場面において最も注意を払うべきことは、まさに聞き手がその場で感じ取った苛立ち、動揺や困惑、といった「不調和音」であると言える。こうした齟齬、苛立ちや違和感は、「聞き手と語り手の相互行為や語りの様式の齟齬が産出するポリフォニーそのもの」であり、それらを反省的に問い直す試みこそが、「インタビュー過程の状況や語り手の生活世界を理解する契機」（桜井 2015：45–47）にもなり、真の「対話」に至るまでに見過ごしてはならないプロセスだと考えられる。

3.3　インタビューの一回性から終わらない「対話」へ

「インタビューの一回性」について、石川（2015：242–245）によれば、特定の現象をめぐる「複数の文脈の交差」、すなわち「語り手のライフ、及びインタビューのもう一方の当事者である調査者のライフ、さらに当時の時代的・社会的状況」といった複数の文脈の重層化が存在すると指摘されている。石川（2015）の論考において特に留意すべきなのは、こうした語りが備えている「厚みと深み」は、自ずと見えるようなものではなく、聞き手 / 書き手である調査者によって表現するものであるという点である。

こうした「インタビューの一回性」の内実を踏まえ、石川はさらに「「対話」の相手は誰だったのか」という問いを巡って、一回だけの「対話」ではなく、終わらない「対話」へと拓かれていく二重の意味について論じている。つまり、一つ目として、「語り手－聞き手」の範囲で考えると、「調査者自身が経験や知識を積み重ねていけば、おのずと見せられるものは変わっており」、また、「フィールドや社会の状況は時々刻々と移り変わり、語りを位置付ける文脈も一定不変ではない」（石川 2015：244）ことを併せて考慮すれば、例え同じ語りであっても、調査者は自分自身の蓄積と社会状況の変容が続く中で、絶えず振り返ってその時その場の語りと自ら対話し続けて、そこからの意味を問い直し続けることはできるではないかと考えられる。

また二つ目として、対話は上述したように「語り手―聞き手」に加え、「聞き手―読み手」の間でも成立しうる。小倉（2011）は、語り手と聞き手が関わる調査過程を詳細に提示する意義について、「読者がひとつの社会過程たるライフストーリーの生成プロセスを追体験（追試）できるように」と論じている。また、石川と西倉（2015）は、さらにその可能性について、「調査協力者、調査研究者、読者の三者がその社会過程に参与することで新たな社会的現実が構成されていく」ことが、「ライフストーリー研究がもたらす『知』」であると論じている。

以上のうち、特に一つ目の「語り手―聞き手」の間で「対話」が続いていく可能性と関連して、桜井（2012：50）は、調査者が如何に努めても、その語り手と聞き手の非対称性を完全に払拭することはできないと言及している。とりわけ社会構造的非対称を克服することの困難を自覚しておく上で、調査者は相互行為の中で問題と自分の役割を自覚し、そうした社会的抑圧に抵抗したり緩和したりする方法を工夫することを通じて、

インタビュー過程などの相互行為を介して「人間として出会う」ように努めることが、関係の対称性の推進に寄与することになると指摘している。

4. 移動を介した経験から読み解かれる女性たちの「歴史実践」

4.1 「パブリック・ヒストリー」の動向に軌を一にした保苅の「歴史実践」

ここで保苅が提起した「歴史実践」を考えるにあたり、「『歴史』は、歴史学者の独占物ではない」と考えるパブリック・ヒストリー（public history）の動向を念頭に置く必要がある。1970 年代にアメリカで萌芽した「パブリック・ヒストリー」とは、「現代社会の中で歴史学が向かうべき、一つの新しい方向性を指し示すもの」であり、「過去を過去のこととして過去に留め置くのではなく、過去と現在との終わることのない対話を通じて、過去を現在に関わるものとして現在に引き戻して、さらにこれからの未来に引き伸ばして、人々のために役立てる『現在史』である」（菅 2019：3–4）と述べられている。

その主たる論拠として、菅（2019）は以下の 2 点を主張した。まず、第一の眼目とは、歴史学の展開される場が「アカデミアの外側（outside of academy）」に置かれることが強調され、それを「大学や研究機関など、従来のオースドックスなアカデミック・ヒストリーが展開されてきた場を越えた場へと歴史学を開放することを目指す運動」と解釈する「歴史学の『場』の開放」[6] として位置づけている（菅 2019：27）。また、これに応じて、「歴史学の『担い手』の開放」という点が第二の眼目として近年特に賞揚されるようになったのが、単純に歴史学を行う担い手を拡大することを意味するのではなく、それぞれの担い手に新しい関係性＝「協働（collaboration）」を要求することである。すなわち、歴史の「専門家 / 非専門家」「生産者 / 消費者」「発信者 / 受容者」といった、従来の分断・上下の関係性ではなく、多様な人々が多元的な価値を尊重すると共に、多様な主体が権威を共有することによってフラットにつながり協働するという関係性が重視され、またそれによって歴史の「協働的統治（協治、collaborative governance）」を目指す（菅 2019）とされている。

このような運動の盛況を背景に、「戦略的歴史学者」を標榜した保苅実[7] は、前述した歴史学の「担い手」の開放という課題に関連し、「誰が歴史家なのか」という問いを突き詰めた。そして保苅は、歴史家に情報提供をするインフォーマントについて、歴史を語らされる客体ではなく、「歴史する（doing history）」主体であり、さらに歴史実践する主体であるとし、彼ら彼女らもまた「歴史家」であると考えた（保苅 2008：12）。オーストラリア先住民のアボリジニの歴史実践を研究する保苅は、例えば「アメリカのケネディ大統領が、グリンジ・カントリーに来た」という先住民のオーラル・ヒストリーにどう向き合うことに際して、実証主義や世俗主義とは異なる「もうひとつの経験主義」を拓けないかという方向性を提示した。

こうした視座を踏まえながら、保苅は、長い年月をかけて先住民の村にて彼ら・彼女

らと共に過ごす中で、グリンジ達が「注意深くある身体」を通して、先祖代々のこの大地のあちこちを移動することにより、「歴史を聴くし、歴史に触れるし、歴史を嗅ぐし、歴史を演じるし、歴史を語る」という形で、先住民の歴史実践が生じたことを観察している。従って、こうしたアボリジニの日常的実践のなかで、「身体的、精神的、霊的、物的、道具的に過去と関わる＝結びつく行為」が「過去を呼び起こし」、「歴史とのかかわりをもつ」諸行為として、「歴史実践（historical practice）」という概念を保苅は提議したのである（保苅 2008：22）。こうしたアボリジニの「歴史実践」が生み出す歴史をどのように受け止めたらいいのかについて、歴史学者の清水透は以下のように説明している。

> 「オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践を検討することを通じて、学術的歴史学による『過去の独占』に異を唱える…その方法として、歴史分析を長老たちに学び、それを通じて、学術的歴史学とは異なる過去との関わり方（歴史実践）を具体的に提示し、そこに表出する『普遍化できない歴史』を、伝統的実証史学のように『間違った歴史』として排除することに対しても批判する。むしろこうした『間違った歴史』を、そのまま『リアルな歴史』として引き受け、人間の歴史世界が深く多元的であることを示しつつ、その先に見出せる地平として、『歴史経験への真摯さ（experiential historical truthfulness）』をキーワードに諸歴史空間を接続する可能性を模索しようとする」（清水 2008：347）

すなわち、「ラディカル・オーラル・ヒストリー」とも呼ばれている歴史実践を、単なる「神話」としてはなく、我々の歴史と接続し共奏させる歴史をめぐる「声の複数性」として具体化しようとする可能性が秘められていると考えられる。ただし、ここで見過ごしてはならないのは、フィールドの現場における調査者自身の姿勢である。例えば、保苅は単に観察していたのではなく、アボリジニたちと一緒に生活していく中で具体的に行っている歴史実践を一緒に経験している。つまり、コミュニティに暮らす人々と一緒になって「歴史する（doing history）」ことを、保苅は心懸けた。それと同様に、パブリック・ヒストリーの最重要コンセプトである「協働」という実践理念では、調査者と当事者との間に、共に経験することで互いの対話を促進することも強調されている。

以上を踏まえ、本研究では、パブリック・ヒストリーの動向と深く繋がる保苅の「歴史実践」の概念を大いに参照し、インフォーマント自身が「歴史する」主体であるという基本思想を念頭に、特にインフォーマントが日常の中で身体を通じて歴史と結びつく具体的な行為に注意を払ってきた。同時に日常の場でその歴史実践を共に経験した調査者自身との間の「協働」（3 章で提示した「相互行為」の概念と類似）にも目を向けている。

4.2　移動を介した女性たちの経験から「歴史実践」を読み解く本研究の立ち位置

前節の保苅が提示したオーストリア・アボリジニが先祖代々の大地に根ざして「歴史

をしている」営為から受けた示唆を踏まえつつ、本研究では女性たちと長く関わる時間における筆者らの観察を基に、女性たちの「歴史実践」[8] の特徴をここで整理しておきたい。

まず、女性たちの歴史実践において、日中国境を越えた移動の経験が彼女らにとって視野を広げる鍵となり得る経験でもあった。すなわち、5 章でも述べていくように、女性たちが実際に日中それぞれの東北地域という地理的空間を超えて、「二つの東北」を共に生きている姿を窺い知ることができた。具体的には、まず一つ目として、彼女らが移住後に、決して母国の東北を忘れるのでなく、常に中国東北部のことを思いつつ日本東北の地で暮らしていることである。よくあるケースとして、母国の親族と毎日の長時間の視聴電話をしており、まるで中国東北とリアルタイムで生きているような人もいる。また二つ目として、女性たちが日本の東北地方への移住経験を通じて、改めてこれまで生きてきた中国東北のことを理解し始め、また中国東北で暮らした経験を思い出しつつ、日本東北を理解していこうとする姿である。すなわち、双方の地での生活経験について自ら再帰的に応答しつつ、目の前の暮らしを営んでいる彼女らの姿勢をここでは強調しておきたい。

また、女性たちの歴史実践は、言語より身体を介したものという点に留意しておきたい。すなわち、本研究で着目した女性たちは、90 年代末頃の比較的早期である移住ブームの波に乗って結婚移住した世代で、近年の留学などのルートとは異なり、こうした女性たちの多くは東北部の土地柄による人脈ネットワークを頼りながら（郝 2010）、片言の日本語しか話せないまま結婚移住しており、20 年以上も長い間日本で暮らす中でもいまだに簡易な日本語を駆使して暮らしている状況が少なくなかった。このように、とりわけ移住後の生活では、言語の壁があったものの、彼女らが身体を介して日常の暮らしに見え隠れする歴史の痕跡を徐々に実感していったのである。

このような移動を介した生活経験を基に、自ら身体を通じて日々営まれる女性たちの歴史実践から読み解く「歴史」に対して、私たちがどう受け止めていくべきなのかについて、先述したアボリジニの歴史実践への向き合い方（清水 2008）を参照しつつ、述べていきたい。調査者である筆者らがこれまで慣れ親しんだ「歴史」は、恐らく同時に社会で広く語られる「歴史」でもあると言えるが、それとは異なる女性たちの「歴史」に真摯に耳を傾けるべきである。ここで何よりも重要となるのは、彼女らの「歴史実践」の傍らにいる中で、調査者自身がはじめて気付かされたこと、またそれに対する自らの内省である。それは、3 章で詳述した調査手法も関連しているように、インタビューの場面では、聞き手にとって「人生観や世界観が覆されるような『地殻変動』とも呼ぶべき劇的変化が生じること」まであり、それは語り手の経験を理解しようとする際に、「調査者として語り手と相対化した自分を問い続ける過程」において伴う「調査者の自己変容」である（石川 2015：220）。すなわち、こうした過程において、調査者自身が自らの眼差しの根底にある常識や価値観（「構え」）を意識し、それによって調査者がこれま

で慣れ親しんだ「歴史」、すなわち調査者が生きる時代・地域における歴史教育の影響を受けた「歴史」の一面性について徐々に気付いていくことになるのである。ここで強調しておきたいのは、実のところ、それが決して調査者だけの「構え」ではなく、読者の多くも同様の常識や価値観に根ざしていることでもある。それゆえに、女性たちの声は、広く語られている私たちの「歴史」の中で、「沈黙の声」として置き去りにされているのである。

以上の女性たちの歴史実践の特徴を念頭に、本研究では、単に女性たちの語りに留意するというよりも、彼女らの日々の中での細部に見え隠れする諸行為に留意しつつ、また調査者自身が調査の中で女性たちとの「協働」する中で自ずと生じた「自己変容」にも目を向けている。

5. 対話を通じて拓かれていく「歴史実践」

5.1 目に見えない女性たちの「満洲」記憶及び福島に留まり続けるという選択の背後

上記の方法論に関する議論を踏まえ、ここで改めて押さえなければならないのは、本研究における聞き手である筆者と語り手の女性との関係性、特に世代間と生活地域間の差異についてである。筆者は 1990 年代生まれの中国東北外部の南方出身で、現在関西部に居住している一方、女性たちは 1950 ～ 60 年代に中国東北部で生まれ、現在福島県に居住している。この差異は分析の文脈において重要になってきた。なぜなら、筆者らはかつて女性たちの「満洲」記憶に関する研究（王・三好 2023）の際に、最初は「調査者が同じ中国人同士だから話しやすいだろう」という先入観のもと、インタビューを行ったものの、実際には予想外の多くの齟齬を経験した。こうした対話における「不調和音」とは何かということを意識しつつ徐々に見えてきたのは、彼女らの出身地である中国東北と、筆者が育った東北以外の地域との間で、「満洲」の歴史現場を身体的に経験してきたか否かによる「満洲」記憶の違いが存在することであった。特に留意すべきなのは、こうした「不調和音」が象徴するように、実際には「満洲」記憶において主導的なナショナルな記憶が存在し、その下で、「満洲」の歴史現場である中国東北の地で何世代も暮らしてきた女性たちの記憶の方が、むしろ周辺化され、結局は「沈黙」の窮地に追い込まれていたことである。このような記憶をめぐる権力構造について、筆者が女性との対話の中ではじめて気づかされたのである。

具体例としては、インフォーマントである霞さん（仮名）が、故郷に残る「満洲」時期の建物や電車などを「東北の文化の一部」として捉えているのに対し、筆者らはそれらを「植民地期の風景」として東北から切り分けて見てしまうという視点の違いが浮かび上がってきた（王・三好 2023）。霞さんは 1960 年代後半に、中国東北部のある炭鉱都市の 5 人家庭で生まれ、当時の産業ブームに恵まれ、霞さんの一家は比較的な豊かな生活を送っていた。大卒後、霞さんは地元の公務員になり、90 年代初頭に現在の日本

人の夫と出会い、その後結婚して夫の実家である日本の東北地方に移住した。移住後、霞さんは仕事以外に、移住先に住む中国残留日本人へのサポートをボランティア活動として取り組んでいる。また、地元の方言には日本語の影響があり、「中国語式の発音で日本語を読んでいた」という。対話の中で、霞さんの暮らしに溢れた「満洲」の痕跡に対する複雑な思いが読み取れた。それらは、霞さんにとって、外来文化の影響を受けたものというよりも、彼女の幼少期から日々の生活の中に織り込まれてきた東北の一部であり、「「満洲」を内包する東北」として受け止められていたと分かってきた。この違いを通じて、筆者は自分自身が知らず知らずのうちに「中国」という近代国家の枠組みから物事を捉え、ナショナルな叙述の視点に陥ってしまっていることに気づかされた。それと対照的なのは、民族・国家の枠組みを超えた長いスパンの東北史を織り込んだ霞さんの身体感覚であり、中国東北部の歴史を振り返ると、遊牧民族を始めとする諸民族の雑居地から漢人の大規模進入へ、また権力の中心である中原から離れた関外の地として扱われた時期から中日露が競争しあう時期へと移り変わっている。よって、「移住社会」の特質を有する建国前からの東北部の土地柄や、激しい政権交代において「ただ生き残りたい」という戦争世代の素朴な思い、さらには「満洲」経験世代から受け継がれてきた記憶などが、この対話の中で度々現れてきた。このように激動する東北の土地を生きる身体感覚は、日常的な風景や世代間の雑談話により次の世代へと確実に受け継がれており、女性たちの歴史実践の底流となっていること（王・三好 2023）が、対話の中から徐々に見えてきたのである。こうした長い地域史を踏まえてみると、現在の人々の生活の前提である新中国政権成立も、むしろ後の出来事であると言えるのかもしれない。

他方で、冒頭でも触れたように、かつての「満洲」からもたらされた傷跡と重ね合わせるかのように、移住後に待ち受ける彼女らが一人では抱えきれない様々な辛さがあることも分かってきた。さらに 3・11 震災に見舞われたにもかかわらず、彼女らが日本の東北であるこの地に根を張って暮らしを営み続けるに至る、その意味が次第に見えてきたのである（王・三好 2024）。ここで重要なのは、日本の東北地方の痛みについて、女性たちは最初から知っていたわけではなく、むしろ移住後に、ぎこちない日本語を駆使しつつ身体を通じて日常の細やかな側面から察していったことであり、実際に思い描いた暮らしとは異なるものの、彼女らは辛さを抱えながらも長くこの土地と関わっている中で、かつて中国東北で生まれ育った経験を思い返しながら、日本の東北の痛みを背負って生きる身近な庶民一人ひとりの生に共感するようになっていったことが分かってきた。

ただし、こうした共感まで辿り着くことができたのは、異なる「二つの東北」の対立や断絶に着目するのではなく、時間と共に流れる共通する「東北」の痛みに目を向け、身をもって感じ取ろうとする彼女らの「歴史実践」そのものにあると言えよう。具体的には、東京への電力供給地となる福島原発に象徴されるように、「東京中心主義」の犠牲となる「東北」問題（赤坂ら 2011）と類似する関係性が、中国社会の単位制が弱体

しつつある社会転換の文脈において、「南方」と「我々東北」という象徴的な言葉が女性たちの語りから窺え、単位制が弱体化しつつある社会転換の過程で見えてきたと言える。つまり、「二つの東北」は、それぞれ異なる近代化の経路を歩んできたものの、類似した大きな進歩叙述が牽引する下で、共に「中央」との関係で対置される「周辺」の立場に追い込まれていったのである。

ここで対話的インタビューの場面を補足すると、筆者は中国南方出身で大阪に住んでいたことから、「あなたたち南方人」、「あなたたち大阪人」といった言葉が度々女性たちの口から聞かれ、他意はない距離感を確実に感じていた。一方で、かつての単位生活や豊かな農産物について話す際には、彼女らの隠しきれない誇りと喜びの中に、一抹の寂しさも窺えた。それは、中国東北での経験を振り返えると、彼女らは他の地域よりも単位に依存性しており、その崩壊が精神的なダメージとなっていた。だからこそ、移住先の日本東北地方に留まり続ける選択の背後には、馴染み込んだ故郷の川沿いの暮らしを、再び深い傷を負ったこの福島の地で見つけようとし、彼女らの人生にとって大切な意味をなすものになっていったのである（王・三好 2024）。それらは、「単位社会」の時代における純朴で親密な人間関係であったり、清貧であったものの安泰した暮らしや自給自足な生活の基盤となす豊かな自然環境であったりと、いずれも広く語られる「進歩」叙述に遅れるものと、故郷の経済的な躍進により自ずと排除されたものであった。

5.2　女性の故郷の町々で共に過ごしている時間で見えてきた深層にある「郷愁」

これまでの調査を踏まえつつ、語り手と聞き手における「対話」の継続・発展に関して、ここでは、2024 年 8 月に霞さんの一時帰国に筆者が同行し、中国東北の地に赴き、彼女の故郷の町々を一緒に歩き回りつつ過ごして見えてきたことについて触れておきたい。霞さんの故郷を訪れる前のこれまでの聞き取りの中では、炭坑区の暮らしを言及する度に、炭鉱都市の故郷にて恵まれた豊かな子ども時代を強く口にしており、彼女の隠しきれない誇りを強く認識した。しかし、実際に彼女と一緒に炭鉱の町々で過ごす間は、時折彼女の顔に疎外感や寂しさが見え隠れし、故郷に対するある種の後ろめたさも含まれており、一層複雑な彼女の表情が窺えた。

霞さんの故郷は、石炭資源に依存し、100 年以上にわたる炭鉱開発の歴史を持ち、それに伴って炭鉱を中心に鉄道と町の建設が進んできた。しかし、90 年代以来、石炭資源の枯渇に伴い町は衰退していく。それは、中国東北部において資源に依存し、重工業発展の興廃に伴って浮沈を辿った町々の中の典型的な一つであると言える。上記に触れたように霞さんは、60 年代の新中国の建国当初の重工業を中心に建設していた時期で生まれ、父親が生涯をかけて働いた炭坑区に位置する職員集団住宅地で育ち、まさに建国後の石炭開発の最盛期に恵まれて物質的に豊かな環境で成長してきた。しかし、現地をともに歩きながら言葉にしたのは、小さい頃から「大人になったら絶対この炭鉱の町を離れたい」という思いを抱えていたという。なぜなら、炭鉱に従事する人々の厳しい

図 1　衰退中の露天掘り炭鉱
（2024 年 8 月 25 日筆者撮影）

図 2　町内の鉄道沿線に並んだ空き家
（2024 年 8 月 25 日筆者撮影）

労働環境を間近で見てきたからであった。現在その町に未だ稼働している唯一の露天掘り炭鉱の縁に立ちつつ（図 1)、霞さんが過去を語ってくれた。

> 「炭鉱工人（労働者）たちはみんなお酒が大好きだった。明日生きていられるか分からないからね。…小学校の同級生には、お父さんが（炭鉱事故で）亡くなった子が多かった」。

一方で、現在静かに錆びれていく町や、いつからか廃止された町内の電車や鉄道沿いに並ぶ空き家（図 2）を眺めながら、「あんなに輝いた時期があったのに…」と霞さんが呟く姿は、彼女の複雑な感情を物語っていた。こうして町々を歩きながら、「満洲」時期の開発の痕跡、建国後の単位時代の集団住宅、また戦争前後を貫いた重工業工場が次々と目に映り、各時期の歴史がこの地に重層しており、また炭鉱の衰退によりこの町の人口も高齢化してゆく光景は、筆者自身の心にも染み入った。実際に、霞さんは、20 年以上も日本で暮らしており、年に何回か故郷に戻るものの、こうした黙々と錆びていく故郷の風景を見つめつつ、思わずまゆをひそめながら「心が痛むのよ」と語った。

こうした共に炭鉱の町々で過ごす時間で見えてきたのは、これまで言葉にしていないものの、移住後により一層色濃くなる霞さんの「郷愁」であった。それは、小さい頃から恵まれていた一方で、危惧を抱えながらずっと故郷から離れたいと思いつつ、ようやく離れた現在では、逆に過剰開発で錆びていくこの場所を安易に切り離せない中で何度も顧みている姿から、霞さんの言葉では表現しきれない複雑な葛藤であるのではないかと感じられた。筆者らは数年間にわたり霞さんと継続的にインタビューを行なってきたが、今回は単なる「語り」の場ではなく、彼女と共に「歴史している」場であり、さらには彼女の深層に見え隠れしている「郷愁」についても感じ取っており、言い換えれば、

そこには終わらない「対話」の可能性が広がっていくようにも思えた。

6. おわりに

繰り返し述べてきたように、本研究では、満洲移民など特定の歴史的出来事に焦点を当てるのではなく、あくまでも 3・11 震災を経験した中国人女性たちへの暮らしの調査から出発した。ただし、加害／被害の視点に立たないからこそ、調査を続けていく中で、国際結婚を機に日本の東北の地に来たものの、過去から現在に引き続く傷跡を重ね併せながら、さらに災害をも経験した女性たちの営みに更なる重要な意味が見えてきたのである（王･三好 2024）。すなわち、彼女らが日々の生活の中で受け止めてきた双方の「東北」の痛みというものが、国境を越えて移動する一人ひとりの生活者として、東アジアの歴史の連続性を実感させるものであり、それゆえに国境を越えた生活の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される日々の営みが、尊い「結び目」となり得る女性たちの「歴史実践」である。よって、こうした調査の姿勢と対話的構築主義のライフストーリー法という方法論を採用してきたことが、結果的に功を奏したと言えるのかもしれない。

他方で、女性たちと一緒に過ごしつつ対話を重ねる中で、筆者ら自分自身の「構え」を徐々に意識し、それに対して内省する中で、彼女らの意味世界に少しずつ近づくことができたように思う。そして、こうした女性たちとの出会いや対話を通じて、例えば、福島において、また中国東北部において、自分ひとりでは決して見えなかった重層的な風景を新たに垣間見ることができるようにもなってきた。こうした過程の中で、常に学ぶことができたのが調査者・聞き手である筆者自身であり、女性たちの生き様から得た深い示唆は、研究調査上彼女らへの理解を深めたことだけに留まらず、筆者自身の人生にも重要な影響を与えたと言っても過言ではなく、感謝の念がわき上がってくる。

さらに、筆者らが所属する研究室において、2022 年に立ち上げた「記憶の継承を祈念するグローバル･ダイアログ（記憶の継承ラボ）」の活動の一環として、院生メンバーと共に長崎、水俣、沖縄、そして福島を訪れ、原爆、水俣病、沖縄戦、そして東日本大震災に関する記憶と、その現場の重層的な現実に受け止めつつ暮らす人々の眼差しを生活の次元から理解していくためのフィールドワークをする機会に恵まれた。こうした貴重な学びの機会で、筆者らが各地に足を運び、実際にその場所に立つことで、単なる「加害―被害」の二項対立や、決められた地理的な枠組みに収まりきらない、人々の生の舞台における多様な営みを感じ取ることができることを実感したのである。その中で共通して見えてきたのは、庶民一人ひとりの弱さがあるのと同時に、苦しい記憶を抱えながらも生き抜く生活者のたくましさも垣間見え、こうした生活者の営みが筆者らの胸に深く響き、自身の視野を広げる貴重な糧となっていると感じている。こうしたフィールドワークから得た示唆も内面化し、拓かれる「対話」の中から、引き続き日中「二つの東北」を生きる女性たちの「歴史実践」を見つめていきたい。

注

1）中国東北部では、新中国建国以来、単位体制が全国範囲で確立されると「老工業基地」の固有性により「典型的単位制」（田 2007）が形成されたために、それを「工業単位制社会」（謝 2019）と特徴づけている。すなわち、1948 年に中国の他の地域より先に戦争から解放された東北部は、最も早く計画体制と単位体制に入った地区であり、また旧満洲とソ連による工業基盤を生かしつつ、計画経済時代に入ると、石油や炭鉱などの伝統的な原材料産業が集中していった。国営経済の割合が高いために、都市化レベルも全国平均水準より高く、長期間にわたり全国経済の先頭に立っており、東北部は単位制の推進モデルとも称された。

2）ここでの「お爺お婆」は、霞さんが福島でサポートする中国残留日本人たちを指す。霞さんのボランティア活動への参与観察を行った中、「○爺」という相手の名前あるいは「○○先生」という敬称で、親しく相手を称することがあり、また支援対象よりも自分の親族としてサポートする霞さんの思いを含めて、本研究では「中国残留日本人」という公式的な呼び方の代わりに、「お爺お婆」のように記したい。

3）「東北学」を提議した赤坂氏（赤坂・鶴見 2015：124）は、「どのような単位で東北を見るか」という問いに対し、「暮らしとか生業の舞台として」の「地域」を「起点としてはじまる」が、「その地域がみずからの内にはらんでいる文化の多様性というものを眺めていると、それはものすごく広く、可能性としては国家を超えていくような領域に広がっている」と示唆した。この指摘に照らし合わせると、本稿で取り上げた女性たちは、まさに自らの暮らしの舞台とした「地域」に根ざした日々の営みを通じて、実に「東アジア内海世界」のように、「国境によって閉ざされる」ことのない、「人と人とがさまざまな形で交わり、結びあっている」、いわゆる「二つの東北」の「結び目」を生み出す可能性を秘めていると考えた。

4）11 名の女性たちは、50･60 年代の「ベビーブーム」世代であり、60･70 年代に成長し、改革開放初期に就職、90 年代末の単位解体を経験し、改開移民ブームの比較的初期に来日している。彼女らは移住後の適応期を経てまもなく 2011 年に 3・11 震災に見舞われ、それまで築いてきた生活基盤が大きく変化したものの、日本の東北地方で生を営み続けることをいずれも選択している。

5）インタビューの相互行為から生じる「非対称性」について、桜井（2012：159）は、聞き手と語り手がライフストーリー・インタビューから得るものの違いを巡って、前者は「調査目的をもって特定のリアリティを探ることで自分の業績となり何らかの利益を得る」のに対し、後者は「日常の生活をおくる実践者」であり、「そもそも準拠する社会的世界が異なっている」と指摘している。

6）歴史学の「場」の開放に伴い、アメリカではパブリック・ヒストリーは、博物館や

文書館、図書館、国立公園、文化遺産などを含む歴史的景観保護区などで積極的に展開され、さらにそれは小中学校や、新聞社、テレビ･ラジオ局、ゲーム政策会社、コンサルティング会社など、歴史学を応用する実に多様な現場へと広く広かれてきていると指摘されている（菅 2019）。

7）保苅とその学術動向との関連性について、菅（2019）は保苅が歴史学を学んだオーストラリアではパブリック・ヒストリーが盛況であったため、そこで保苅の考えに与える影響の可能性について言及している。

8）女性たちの「歴史実践」を考える際に、普通の人々はどうのように過去と繋がるのかに関して参照できる。1994 ～ 1995 年にアメリ学者の調査では、博物館や史跡、自らの家庭という場で過去と密接に繋がり、そこから得られる情報は、専門家である歴史学者からのそれより信用され、またこうした場での歴史実践が、学校などの歴史教育よりも、個々人が持つ過去の理解にインパクトを与えているといった結果がある（菅 2019）。

引用文献

赤坂憲雄・小熊英二・山内明美（2011），『「東北」再生：その土地をはじまりの場所へ』，イースト・プレス

赤坂憲雄・鶴見和子（2015），『地域からつくる：内発的発展論と東北学』，藤原書店

藤田美佳（2005），「農村に投げかけた『外国人花嫁』の波紋―生活者としての再発見―」，佐藤郡衛・吉谷武志編『ひとを分けるものつなぐもの―異文化間教育からの挑戦』ナカニシヤ出版，221–251 頁

福村真紀子（2017），「地域日本語教育から創る『公共の場』―結婚移住女性をめぐる研究を手がかりに―」，『早稲田日本語教育学』22，81–100 頁

郝洪芳（2010），「日中国際結婚に関する一考察―業者婚する中国女性の結婚動機を中心に―」，『京都社会学年報：KJS』18，67–81 頁

保苅実（2018），『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』，岩波書店

胡源源（2016），「中国における国際結婚移民の受容と家族維持戦略―東北地区の H 県を事例として」，『21 世紀東アジア社会学』8，107–123 頁

石川良子（2015），「〈対話〉への挑戦―ライフストリート研究の個性―」，桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか：対話的構築主義の批判的継承』新曜社，217–248 頁

石川良子・西倉実季（2015），「〈対話〉への挑戦―ライフストリート研究の個性―」，桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか：対話的構築主義の批判的継承』新曜社，1–20 頁

桑山紀彦（1995），『国際結婚とストレス―アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族』，

明石書店
李善姫（2018），『外国人結婚移住女性と「東北の多文化共生」―「他者化」と「不可視化」を乗り越えて―』，東北大学
右谷理佐（1998），「国際結婚からみる今日の日本農村社会と『家』の変化」，『史苑』59（1），72–93 頁 .
森本豊富（2009），『移動する境界人：「移民」という生き方』，現代史料出版
小倉康嗣（2011），『ライフストーリー研究はどんな知をもたらし，人間と社会にどんな働きかけをするのか:ライフストーリーの知の生成性と調査表現』，『日本オーラル・ヒストリー研究』7，137–155 頁
桜井厚（2002），『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方―』，せりか書房
――（2012），『ライフストーリー論』，弘文堂
――（2015），「モノローグからポリフォニーへ―なにが私を苛立たせ、困惑させるのか―」，桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか：対話的構築主義の批判的継承』新曜社，21–48 頁
賽漢卓娜（2011），『国際移動時代の国際結婚：日本の農村に嫁いだ中国人女性』，勁草書房
菅豊・北條勝貴（2019），『パブリック・ヒストリー入門：開かれた歴史学への挑戦』，勉誠出版
田毅鵬（2007），「『典型単位制』的起源和形成」，『吉林大学社会科学学報』47（4），56–62 頁
王石諾・三好恵真子（2022），「国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の主体性とその形成過程」，『アジア太平洋論叢』24（1），97–112 頁
――（2023），「結婚移民として日中『二つの東北』を生きる中国人女性の歴史実践：ライフストーリーから読み解かれる『満洲』記憶」，『生活学論叢』43，28–42 頁
――（2024），「日中『二つの東北』の痛みに向き合いながら生を営むという選択:『単位制』の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えようとする結婚移住した中国人女性の歴史実践」，『生活学論叢』45，15–29 頁
謝雯（2019），「歴史社会学視角下的東北工業単位制社会的変遷」，『開放時代』6，25–44 頁

Intermarriage Immigrant Women Living Between *Two Tohokus*: The gradual unfolding of historical practice through life stories

Shinuo WANG and Emako MIYOSHI

This study is based on six years of fieldwork in Fukushima, that was initially motivated by an interest in understanding the experiences of local Chinese residents following the 2011 Great East Japan Earthquake. During this research, the authors encountered a group of middle-aged women from Northeast China who had immigrated to Fukushima through intermarriage with local Japanese men and had been residing there since the late 1990s and the early 2000s. These women explored their individual memories of Manchukuo under the dominant national post-war narratives of the 1960s and 70s, and later faced the collapse of the "*Industrial Danwei System*" during the 1980s and 90s — a period of massive transformation and social upheaval in Tohoku (Northeast) China. In response to these shifting conditions, they sought stability by marrying into Japan's Tohoku region, envisioning Japan as an "advanced nation." However, after migration, they encountered various linguistic and social challenges that were exacerbated by the 3/11 disaster.

A notable observation is that despite the layered hardships these women experienced, they chose to remain in Fukushima, sustaining their livelihoods by establishing mutual local support networks after the 3/11 disaster. As the research progressed, it became clear that their narratives are not merely stories of survival, but also of "historically-tied life experiences," shaped by encounters with legacies of *Manchukuo* history both in China and Japan. Through long-term engagement with these women, it is gradually revealed how their lives have been deeply influenced by the transregional historical contexts of the "*Two Tohokus*." Furthermore, their interactions with local elderly residents in Fukushima enabled them to reconnect with the historical legacies of "*Two Tohokus*," thereby bridging the two regions through their everyday practices.

Based on the complex realities revealed through fieldwork, a review of existing studies on intermarriages suggests that, while these prior studies have provided significant insights, some tend to focus predominantly on women's experiences in the host society, neglecting to capture the significance of their transregional experiences, particularly the unique historical and regional contexts that influence their choices and lived realities. Recognizing this gap, this paper proposes an alternative analytical perspective that situates these women's lives within the "*Two Tohokus*" — a multi-layered historical context, using the concept of "historical practice" proposed by historian Minoru Hokari.

Furthermore, by adopting a life story methodology grounded in a dialogical constructionist approach introduced by sociologist Atsushi Sakurai, this study explores how the key concept of "historical practice" can deepen our understanding of women's transnational migration experiences. Ultimately, this study highlights the potential of putting the focus of the life story methodology on historical practices to capture the depth and complexity of migration experiences. This paper also presents previously unseen insights into the migrant women's experiences that have progressively emerged through dialogic interviews. Moreover, engaging in prolonged and reflexive interactions enabled the authors to critically recognize the limitations of their own perspectives, that were shaped by differences in regionality, generational background, and societal contexts. This reflexive awareness provided an opportunity to approach the women's life-worlds more profoundly, thereby gaining a more comprehensive understanding of the reasons why they chose to remain and live between the "*Two Tohokus*."

Key words: historical practice; life-story research; dialogical constructionism; *Tohoku*; immigrant women